

日本におけるボディコンシャスの流行と身体表現

柳澤 元子¹⁾ 齊藤 秀子²⁾

キーワード：ボディコンシャス 身体表現

1 はじめに

最近のエステブームや美顔ブームは、中高年層だけではなく、若年層にまで及んでいる。そのような社会現象は、エステや化粧だけではなく、洋服や下着のビジネスをも盛んにしている。たとえば、ここ数年、身体を意識したスリムな服が多くなって、下着はカラフルで華やかになっている。その背景には、長年続いている細身のファッションの流行がある。この流行の底流にあるのが「ボディコンシャス」というファッションではないだろうか。本論では、パリ・コレクションに誕生した「ボディコンシャス」について紹介し、日本におけるその影響を考えてみたい。

2 ボディコンシャスとアライア

1985年秋の「86年春夏のパリ・コレクション」において、アズディン・アライアというデザイナーが発表した服が話題を集めた。『繊研新聞』は、このときのコレクションの特徴として、「アライアのデザインに代表されるような、型のファッションの登場である。もう一度肉体をみつめ直そうということなのだろうか。でっぱっているところはでっぱらせ、ひっこんでいるところはひっこめる。西洋服の原点に戻ろうということなのだろう」（1985年10月25日）と述べている¹⁾。

アライアの服はウエストを極端に締めたラインが特徴で、ウールのジャージー素材のスーツやウー

ルのワンピースであった。その時のアライアの服を、マスコミは「ボディコンシャス」という言葉を使って表現した。「ボディコンシャス」body consciousとは、身体を意識したという意味であって、簡単に述べると、ボディラインをありのままに表現しようとした服をいう。

こうしてアライアは、女性特有の身体を意識した細身でセクシーなデザインを発表したことから、「ボディコンシャス」を代表するデザイナーといわれるようになった。彼のデザインの典型的なものは（図1）肩が大きく張り、ウエストラインは細く締めつけ、スカートはミニ丈であった²⁾。

デザイナーのアズディン・アライア（Azzedine Alaia、生年不詳）はチュニジア出身の、つまり、アラブ系のデザイナーである。女優や財閥夫人など少数の顧客のための服作りをしていた。アライアの服作りの方法やビジネスの仕方が他のデザイナーとは異なっているこ

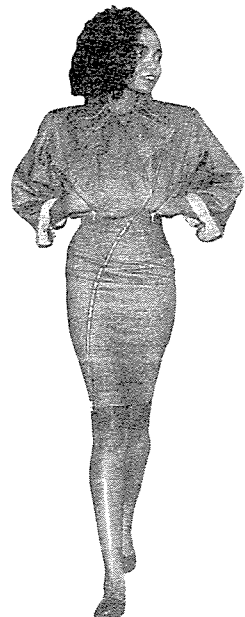


図1 アズディン・アライアのデザイン
（『繊研新聞』
1985年11月18日）

（所 属）

1) 大妻女子大学 家政学部 被服学科（非）

2) 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

ともあり、彼は独自の「アライアスタイル」を作り上げていった。雑誌『エル』に作品が紹介されたことから、アライアの名前が有名になり、世界中にアライアブームが起こった。パリのファッション専門紙『テキスタイル・ジャーナル』は、毎シーズン、パリ・コレクションの終了後、デザイナーの人気投票をしている。そこでアライアは、1980年代になると、常に上位にランキングされるようになった。そして、1985年には、フランスのクチュール協会が主催する第一回オスカー・モード賞の最優秀コレクション賞を受け、パリ・コレクションを代表するデザイナーとなっている³⁾。この賞は、パリでの全コレクション終了後、世界中から選ばれた180名のジャーナリストの投票によって決まる名誉あるファッションの賞である。

いつの時代も、大人の女性をターゲットとしたブランドのデザイナーは美しいシルエットを追求し、女性の身体の美しさを表現しようとしている。こうして、さまざまなデザインが誕生してきた。身体を意識した細身のラインは、突然、80年代に登場したのではなく、それ以前にも、そのようなラインを追い求める傾向はあった。60年から70年代に流行したシルエットは、その後の「ボディコンシャス」の流行に繋がっていると見なせる。特に、70年から80年代にかけて最も人気があった、ティエリー・ミュグレー (Thierry Mugler, 1948～) やクロード・モンタナ (Claude Montana, 1949～) という二人のデザイナーが提案するラインも、大人の女性のセクシーな「ボディコンシャス」なラインを発表していたといえる。しかし、アライアが身体を意識した細身のデザインを発表して以降、「ボディコンシャス」が大流行したことから、「ボディコンシャス」というシルエットはアライアに端を発するといわれるようになった。パリ・コレクションにおいてはミュグレーやモンタナの後輩的存在だったアライアが、「最もオーソドックスに、そしてシンプルにボディコンを表現した」と『増補 戦後ファッションストリート 1945-2000』に、服飾史家の千村典生は書いている⁴⁾。

アライアの影響もあって、86年、87年のパリ・

コレクションでは、「ボディコンシャス」といえるデザインの服が数多く発表された。その時、デザイナーたちが提案したものはニットドレスと、ウエストシェイプやウエストより下をペプラム処理するデザインなどで、ウエストを意識した、アワーグラス・シルエットやチューリップ・シルエットなどのスーツであった。

3 日本におけるボディコンシャス

日本において「ボディコンシャス」が最も流行した時期は、1986年頃から88年末頃と考えられる。これは当然、アライアが1985年にパリ・コレクションで発表したデザインの影響である。

日本における「ボディコンシャス」の流行も、ニットドレスとジャケットスーツの二つのデザインが主なものであった。たとえば、「アライアに端を発したボディコンシャスシルエット」(『JJ』1986年1月号)と表現されるストレッチ素材を使ったスーツとワンピースがある⁵⁾。このデザインは一般の大学生やOLを中心に流行していった。その後、若年層を中心にジャージー等のストレッチ性のある素材を使い、身体のラインを出した女らしいデザインが登場した。

体にぴったりしたワンピーススタイルは、ワンレングスのロングヘアとハイヒールとともに流行していった。「ボディコンシャス」の服装は縮めて「ボディコン」といわれ、この服装に身を包んだ若い女性は「ボディコン・ギャル」と呼ばれた。そして、このようなファッションで踊ることは、

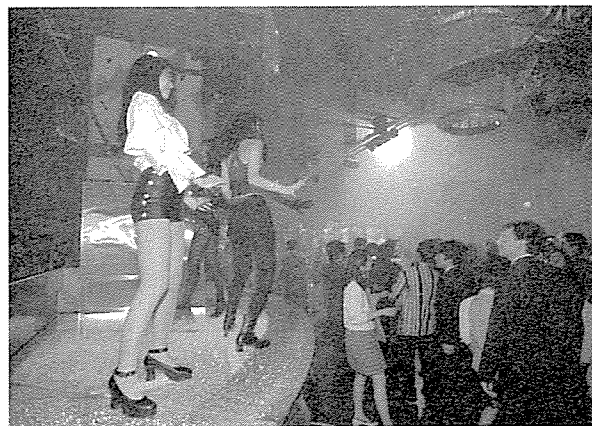


図2 踊る「ボディコン・ギャル」
(『朝日新聞』1994年8月23日朝刊)

当時、大流行した巨大ディスコ「ジュリアナ東京」の名前をとって〈ジュリアナ現象〉として(図2)、マスコミを賑わした⁵⁾。

つまり、「ボディコン・ギャル」は、ディスコでダンスをするという行動と身体を強調した細目の服装の両方を象徴する流行語となった⁶⁾。その後、ミニスカートで、扇子を持ち、ディスコのお立ち台で踊る女性は「イケイケ・ギャル」と、軽蔑的な意味を込めて呼ばれ、乱れた女性の代名詞とまでになった。

もうひとつ注目したいのは、ニューヨークのキャリア女性のスーツスタイルのファッションである。ダーツや切り替えてフィットした美しいシルエットを作り、肩パットを入れて、男性と張りあって、仕事のできる強い女性を表現するために、肩は大きく、ウエストは細く見せたビジネススタイルであった。ニューヨークではこのスタイルのスーツに、通勤時には足にスニーカーを履き、オフィスではパンプスに履きかえて仕事をするという生活スタイルが流行した。通勤の時のスーツにスニーカースタイルは、当時「ヤッピースタイル」と呼ばれ日本でも話題になった。

ニューヨークで流行した、このような肩を張り、ウエストを絞ったジャケットスーツやワンピースを中心としたスタイルは、日本では女子大生やOLを対象としたファッション雑誌に頻繁に掲載された。たとえば、『JJ』には「スリムシルエットの服」と題して、「この秋よく聞かれるボディコンシャスという言葉。体のラインを強調した、スリムなシルエットの服です。セクシーさ、女らしさがいちばん魅力的ないま、エレガンス派に限らず、とり入れてみたいものです」(1986年11月号)という特集が組まれた⁷⁾。このようなファッション雑誌の後押しもあり、OLや大学生など若い女性を中心に、ワンレングスのロングヘアとハイヒールというスタイルが「ボディコンシャス」とともに大流行した(図3)。

日本において、これらのスタイルを流行させたファッションブランドの代表的なものに、「49 AV ジュンコ・シマダ」、「ピンキー・アンド・ダイアン」などがあげられる⁸⁾。前者はルシアン

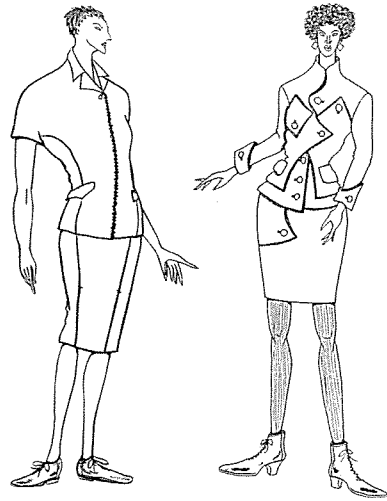


図3 ボディコンシャスのデザイン画
(柳澤元子デザイン)

野村のスポンサーによって誕生し、後者はサンエー・インターナショナルが提携したニューヨークのブランドであった。この二つのブランドは女性の身体のラインを強調したセクシーなデザインでありながら、アズディン・アラリアの表現したデザインよりは抑えたものとなっている。そのため、日本人にも着やすいデザインの服となっていた。当時の新聞に、87年春夏コレクションについてあたってみると、東京コレクションでは「シルエットは、引き続きボディ・コンシャスで、体の曲線に沿ってより女らしく見せている」(『毎日新聞』1986年11月19日朝刊)とある⁹⁾。また、パリ・コレクションでは「今シーズンはボディ・コンシャスにゆとりをもたせた。張った肩は影をひそめ、丸い肩が中心だし、上半身はボディと布の間に微妙な空間を形作る」(『毎日新聞』1986年11月21日夕刊)というように変化していったとある¹⁰⁾。そして、これらの記事を受けて、「今年一年、特に目についたのは『ボディ・コンシャス』という言葉」であったが、「ボディ・コンシャスもどうやら一段落しそう」とあり、そして「女らしさをことさら強調するよりも、もっと自然に、しかも自分の望む生き方を実現していく、そんなしなやかな感性を持った女性たちが増えそうな気配を感じさせる」(『毎日新聞』1986年12月10日朝刊)と書かれている¹¹⁾。このような記事からわかるように、尖鋭的な「ボディコンシャス」が、次



図4 身体ラインを強調したボディコン・ファッション
(『読売新聞』1988年9月28日朝刊)

もともとは成熟した女性の美しさを感じさせる服であったが、日本においては、女子大生や若いOLなどの間で支持された結果、アライアの表現したラインと異なるのは当然であった。「ボディコンシャス」のファッション(図4)は、自分をスリムでかっこよく見せることができることもあって、そのラインが変化しつつも日本の女性に受け入れられたのである。男性にもてたい、よく見せたいという願望がある以上、セクシーな女、異性を意識した服として、「ボディコンシャス」の服は、「男性に見せたい」ことを明確に主張した服として多くの女性に支持されたのである(『読売新聞』1988年9月28日朝刊)¹²⁾。

4 身体表現とファッション

「ボディコンシャス」の流行は、衣生活のあり方にまでさまざまな影響を与えている。とりわけ下着の変化や、身体のエステというべき身体のエクササイズについて注目しなければならない。

下着については、「ボディコンシャス」な服の流行によって、服をすっきり美しく着こなしたいという傾向がより強く広まっていた。ラインを見せない大胆な下着だけでなく、若い女性の中には、下着をつけない着こなしをする人すら登場する。この時に流行した下着に、オール・イン・ワンと呼ばれるボディースーツがあった。これは若い女

第に、一般的な「ボディコンシャス」へと変化していった。

しかし、日本においては、「ボディコンシャス」の流行は終焉したとしても、女性が社会で男性と同じように活躍できる時代を意識した服として注目されていた。この「ボディコンシャス」は、

性だけでなく、身体のラインがくずれはじめていた中年女性に好まれた。また、80年代後半になると、冬の下着の素材として、薄いが暖かい素材が開発され、多く着込む冬でも、シルエットを崩さないで、美しくアウターを着こなすことができるようになっていく。また、Tバックの流行にも「ボディコンシャス」の影響があると考えられている(『読売新聞』1992年7月7日)¹³⁾。

70年代までは、女性の下着といえばブラジャーとスリッパを身につけることが普通だった。しかし、「ボディコンシャス」の流行以降、中高年の女性でも下着にスリッパをつけることは少なくなった。こうして女性は、より一層、身体ラインに注意を向けざるをえなくなった。

ところで、ここでひとつ重要な身体のエステについて指摘しなければならない。米国では1960年代ころから、肥満が嫌われ、痩せている女性が理想とされるようになる。「ジム(スポーツクラブ)通い」が流行し、肥満は社会問題にまで発展していった。肥満は自己コントロール能力に欠けると見なされ、肥満の社員は出世ができないとまでいわれるようになる。1970年代、そして1980年代と進むにつれて、米国社会では美しい体を作るために、ジム通いがいよいよ盛んになっていく¹⁴⁾。この現象は、『みっともない人体』において、B・ルドフスキーが「人間だけが、自分の肉体をかえてみたいという衝動を感じるようだ。動物たちの本能はもっと健康なので、そんな要求を感じることはない」と述べていることの実例である¹⁵⁾。美しい身体を持ち、それを表現したいという欲求は、一部の人だけのものでは決してない。

日本でも米国の影響を受け、身体に対する意識が高まっていく。日本では、痩せていることを良いとする価値観や、痩せていないと流行の服が着られないという現実的な問題が、若い女性に痩せたいという意識を増幅させていった¹⁶⁾。こうして身体理想像として、80年代はスポーツやエアロビクスで鍛えた美しく力強い身体が求められた¹⁷⁾。エアロビクススタジオやスポーツジムがあちらこちらにでき、そこへ通う女性たちが増えていった。身体への意識が、DCブランドブームやディスコ・

ブームと結びつくのである。

日本を代表するデザイナー三宅一生は、「一枚の布」や「プリーツ・プリーズ」のデザインで有名である。しかし三宅一生も、女性の持っている美しいボディを追求し、見せようとした多くのデザインを発表している。たとえば1983年、三宅は「Issey Miyake Spectacle Bodyworks」と題した展覧会を、東京のラフォーレミュージアム銀座で開催している¹⁸⁾。

美しいファッション、美しい着こなしは、美しい身体があってこそ実現する。ファッションはいつの時代にも身体と深く関係している。美しく鍛えられた身体は、もはや、隠すものでなく、「ボディコンシャス」という服をまとい、外へと表現するものとなった。そのためにも「ボディコンシャス」の美しい服が存在したともいえるのである。

5 おわりに

「ボディコンシャス」の流行は、身体を表現することを肯定的にとらえようとする意識の高まりである。「49 AV ジュンコ・シマダ」に代表されるように、日本のブランドも「ボディコンシャス」のデザインを発表し、それらは雑誌で大々的に紹介された。女性が体のラインを見せることに抵抗がなくなり、さらに、体のラインを美しく見せたいという意識の高まりが、さらなる「ボディコンシャス」の流行となった。「ボディコンシャス」のファッションが変化はしても、下火にならなかった理由である。若い女性たちの身体表現の意識を変え、身体のエステブーム、見せる下着やTバックブームなどを引き起こした。

「ボディコンシャス」の流行は、さまざまな面で話題になり、日本の女性に浸透したのである。これは特に1980年代以降、女性の社会進出が急速に進み、女性が社会において、自己主張していくこととも関係があるといえるだろう。

引用・参考文献

- 1) 『繊研新聞』1985年10月25日
- 2) 『ハイ・ファッション』文化出版局、1986年6月号
- 3) 柳澤元子(1995年)『ファッションデザイナー』平凡社、144-146頁
- 4) 千村典生(2001年)『増補 戦後ファッションストリート 1945-2000』平凡社、359頁
- 5) 『J J』光文社、1987年1月号
- 6) 梅棹忠夫総監修、深井晃子、鷺田清一監修株式会社ワコール社長室社史編纂事務局編集(1999年)、『ワコール 50年史—ものから文化』株式会社ワコール、144、145頁
- 7) 『J J』光文社、1986年11月号
- 8) 『ハイ・ファッション』文化出版局、1985年12月号
- 9) 『毎日新聞』1986年11月19日朝刊
- 10) 『毎日新聞』1986年11月21日夕刊
- 11) 『毎日新聞』1986年12月10日朝刊
- 12) 『読売新聞』1988年9月28日朝刊
- 13) 『読売新聞』1992年7月7日
- 14) 水島弘子(2001年)『痩せ願望の精神病理』PHP研究所、21-24頁
- 15) バーナード・ルドフスキー(1979年)『みっともない人体』加藤秀俊、多田道太郎共訳、鹿島出版会、117頁
- 16) 布施谷節子、高部啓子、有馬澄子(1998年)『女子大生の体つきに対する意識とそれを形成する要因』家政誌、49(9)、1037-1044頁
- 17) 高木修監修、神山進編(1999年)『21世紀の社会心理学 8 被服行動の社会心理学』北大路書房、10頁
- 18) Mark Holborn(1995年)『ISSEY MIYAKE』Taschen、59-61頁、143頁

The Relation between the Body Conscious Fashion and Body Expression in Japan

YANAGISAWA Motoko, SAITO Hideko

Key words : Body conscious, Body expression